

複式農業簿記 実践テキスト

新訂版

「わかる」から「できる」へ



全国農業委員会ネットワーク機構
一般社団法人 全国農業会議所

◆ CONTENTS ◆

目 次

はじめに

第1章 複式簿記の原理

第1節 複式簿記とは

- 1 複式簿記と単式簿記 2
- 2 簿記でいう「取引」とは 3
- 3 複式簿記のメリット 5

第2節 貸借対照表と損益計算書

- 1 貸借対照表 8
- 2 損益計算書 11
- 3 貸借対照表と損益計算書の関係
..... 14

第3節 複式簿記一巡の流れ

- 1 帳簿と実務の流れ 20
- 2 勘定 23
- 3 記帳のルール 25
- 4 期首（開始）貸借対照表の作成
..... 28
- 5 仕訳 31
- 6 元帳への転記と集計 35
- 7 試算表の作成 38
- 8 決算整理と帳簿の締め切り 43
- 9 精算表の作成 46
- 10 次期（翌期首）貸借対照表の作成
..... 47

第2章 記帳の実務

第1節 勘定科目一覧表（例） 50

第2節 期首貸借対照表の作成

- 1 資産の部 54
- 2 負債の部 57

第3節 期中取引の実例

- 1 現金の出し入れ 58
- 2 預金の出し入れ 59
- 3 農産物等の売り上げ、家事消費、
事業消費 61
- 4 助成金・共済金等の受け入れ 64
- 5 その他の収入の受け入れ 66
- 6 費用の支払い 67
- 7 売掛金・買掛金 / 未収金・未払金
..... 72
- 8 償却資産の取得・除却等 73
- 9 事業主貸と事業主借 79
- 10 借入金・預り金等の受け入れ・
返済 81

第4節 決算手続の説明

- 1 決算と決算手続
 - (1) 決算予備手続 82
 - (2) 決算本手続 82
- 2 試算表の作成
 - (1) 試算表の必要性 84
 - (2) 試算表の機能と限界 85
- 3 決算整理と棚卸表
 - (1) 決算整理の意味 88
 - (2) 決算整理事項 88
 - (3) 棚卸表の作成 88
 - (4) 決算整理仕訳 90
- 4 精算表の作成
 - (1) 精算表の意味 91
 - (2) 精算表の形式と作成手順 91
- 5 帳簿の締め切りと財務諸表の作成
 - (1) 仕訳帳の締め切り 96
 - (2) 元帳の締め切り 98
 - (3) 財務諸表の作成 102
 - (4) 当期純利益等の繰越し 104
 - (5) 次期貸借対照表の作成 105

第5節 決算整理仕訳の実例

- 1 期中に算入していない売掛金・未収金に対する収益の計上及び買掛金・未払金に対する費用の計上 106
- 2 農産物の家事消費・事業消費の計上 109
- 3 農産物（米・麦等）の棚卸 110
- 4 農産物以外（肥料・農薬等の生産資材）の棚卸 111
- 5 農産物以外（販売用動物・未収穫農産物等）の棚卸 113
- 6 減価償却費の計上
 - (1) 農業の用に供する建物、構築物、農業機械、車両運搬具、動物、植物は固定資産台帳に記帳し、償却費を計上します 115
 - (2) 減価償却費の仕訳 127
- 7 牛馬・果樹の育成費用の計上 ... 128

- 8 家事関連費の家計分の按分 130

- 9 農業経営基盤強化準備金 131

第3章 消費税課税事業者の仕訳実務

- 1 消費税の課税事業者と免税事業者 136
- 2 消費税の経理方式 137
- 3 日常の経理処理の仕方 140
- 4 納付税額等の経理処理の仕方と所得税の決算との関係
 - (1) 一般課税と簡易課税 143
 - (2) 一般課税の場合 144
 - (3) 簡易課税の場合 147

巻末資料

- 1 所得税青色申告決算書 150
- 2 減価償却資産の耐用年数表（抄） 156

第1章

複式簿記の原理

第1節 複式簿記とは

1 複式簿記と単式簿記

ポイント

複式簿記の「複式」とは…

- ◎損益計算と財産計算の2種類の計算をするので複式簿記
- ◎一つの事象（取引）を原因と結果の二つの面から捉えるので複式簿記

複式簿記を理解するには、単式簿記との違いを知っておくことが大切です。

単式簿記は、主に収益（収入）や費用（支出）の発生を記録（記帳）することを目的とした簿記です。

単式簿記の代表的な帳簿として簡易帳簿があります。農業者向けに作られた簡易帳簿で記帳すれば、一年間の売り上げや経費を科目ごとに分類・集計することにより、最終的には、税務申告に必要な青色申告決算書や収支内訳書が作成でき、経営の一年間の成果としての「農業所得」の金額を明らかにすることができます。

収益と費用にかかわる計算なので、これを「**損益計算**」といいます。

複式簿記は、収益や費用の発生について記録する「**損益計算**」に加え、事業で使用する現金や預金のほか、土地、建物、農機具、果樹・牛馬など事業用の資産（債権や債務等も含みます）の増減変化を記録する「**財産計算**」を行います。

損益計算と財産計算の二通りの観点から記録するということは、例えば「庭先販売でトマトが5千円売れた」場合、考え方としては『トマトの売り上げが5千円あった。それによって（事業用の）現金が5千円増えた』と捉えます。

また、「農協の口座から農薬代1万円が引き落とされた」場合には、『農薬代が1万円かかった。それによって（事業用の）預金が1万円減った』と整理します。

このように複式簿記では、「トマトを売った」「農薬を買った」というだけではなく、それによって「何がどうなったのか」——ということまで、言い換えれば「**原因と結果**」を記録します。これを複式簿記では**取引の二重性（または二面性）**といいます。

なお、複式簿記の損益計算によって作られる決算書が損益計算書、財産計算によって作られる決算書が（期末）貸借対照表です。

損益計算書で計算された「利益（所得）」と貸借対照表で計算された「利益（所得）」は必ず一致するなど両者には密接な関係がありますが、詳しくは後述します。

2 簿記でいう「取引」とは

ポイント

◎事業の「資産」「負債」「資本」「収益」「費用」の増減を引き起こす
一切の事柄を複式簿記では取引といいます。

一般的に、商品などの売買などが行われたとき、これを取引が行われたといいますが、簿記でいう取引とは、事業用の財産などに変動を及ぼす一切の事項で、売買などによる金銭やモノの移動、価値の増減などで、すべて貨幣価値によって表示され、記帳の対象となるものをいいます。

したがって、「簿記上の取引」と「世間一般でいう取引」とは意味が違ってきます。

火災による倉庫・機械等の滅失、現金の盗難などは簿記上の取引ですが、単なる「契約成立」だけでは簿記上の取引にはあたりません。

複式簿記では取引の結果、多くの場合は、価値の増加または減少が生じ、あるいは形や性質が変化します。そして、取引の発生に基づき、その価値の変動や内容を正確に記録しなければなりません。この取引は、例えば①農産物を販売した場合、農産物を相手に売ることによって自分はお金を得ることになります。つまり、農産物は自分の手元から出て行き、農産物の売上げという収益が発生するとともに、売上金額が金銭として他人の手元から自分の手元に入ることになります。

また、②肥料を購入した場合には、現金という資産が取引先に移動し、この現金に代わってこちらは肥料という原材料を入手すること（肥料費の発生）になります。

さらには、③乳牛が死亡した場合などは、乳牛という固定資産（財産）が消滅することによって、自分はその価値分だけ損失を被ることになります。

このように取引の結果、財産の変化や損益が発生することになります。

また、④現金を預金に預けた場合には、現金という財産が手元から減少し、代わって預金という財産が増加することになります。これは、損益の発生はありませんが、現金という財産が預金という財産に形を変えたこと、つまり価値の移動が行われたことになります。

参考 簿記の歴史

簿記の歴史は、ヨーロッパにおいて中世末期からルネサンス時代に、商品経済が発達したことに由来します。こうした中で、地中海沿岸地方においては交易活動が盛んになりました。このため金銭の記録の必要性から記帳習慣がめばえはじめ、ヴェネツィア商人が複式簿記を考案し、これが各地に次第に広がったといわれています。

我が国では、江戸時代の後期に至り、商いの場で金銭の貸付けが多くなるにつれ、貸し・借りを明らかにする必要性から、取引順に項目を分けずに棒づけの記帳が始まりました。

また、この帳簿は、福運の到来を願って「大福帳」と記されました。明治に入り渋沢栄一が銀行を開くにあたり、洋式簿記が導入されるようになると、福沢諭吉がアメリカの商業学校の教科書を翻訳し、「帳合之法(ちょうあいのほう)」として出版されることにより、現在の複式簿記の基ができたといわれています。

3 複式簿記のメリット

ポイント

なぜ「複式」が求められるのか…

- ◎大規模な農業経営や、施設園芸、畜産など投資額の大きな経営では、売り上げや経費の記録にとどまる損益計算を中心とする簡易簿記では、経営の管理に必要な財務内容を的確に把握することができないため、経営成績に加え、現在の財政状態や資金繰り等が把握できるような、複式簿記の記帳が不可欠です。
- ◎複式簿記では次の事項を明らかにすることができます。
 - 農業経営の現在の財政状態………**貸借対照表**
 - 農業経営の経営成績………**損益計算書**
 - 農業経営の一定期間（1年度＝通常12ヶ月間）における業績
………**利益（マイナスの場合は損失）**

単式簿記（簡易帳簿）では、

- ① 財産上の変動を完全に記録することができません。
- ② 買掛金の支払いや借入金の返済に際し、資金ショートや「勘定合って銭足らず」の状況にあっても気付にくいといえます。
- ③ 帳簿上の誤りを検査することができません。

これに対し複式簿記（正規の簿記）では、

- ① 経営体の所有する財産の増減変化と損益の発生が体系的に記録されます。
- ② 現金化しやすい資産や債務の状況が分かるので、資金繰りの計画が立てやすいといえます。
- ③ 財産と損益を関連させながら一定の原理によって記録するため、帳簿上の誤りを自動的に発見することができます。